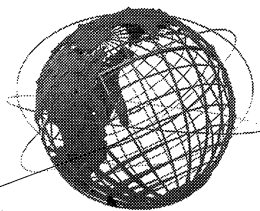


山形辰史

Yamagata Tatsufumi

1963年生まれ。慶應義塾大学経済学部卒業、ロチェスター大学大学院修了(Ph.D.)。現在、日本貿易振興機構アジア経済研究所開発研究センター開発戦略研究グループ長。著書：『開発経済学 貧困削減へのアプローチ』(共著、日本評論社)、『やさしい開発経済学』(アジア経済研究所)ほか。



国際化の中の孤独： 現代版・家出のすすめ

私は岩手県の小都市の生まれである。子どもの頃、自分の周りに英語を話す人は誰もいなかった。近所の教会の牧師さんはスイス人だったが日本語が達者だった。かりに自分が大学を卒業したとしても、英語を話すようになるとか、外国に住むようになるとは、その頃夢にも思わなかったし、望んでもいなかった。むしろなりたかったのは動物園の飼育係である。したがって、現在自分が英語でものを書いたり、議論したり、英語以外の言葉でも意思疎通していることについて、いまだに新鮮な驚きがある。

●国際化の中の孤独

自分にとって国際化とは、ある意味で孤独を深めるプロセスであった。通常「国際化」という言葉には、世界にたくさん友達ができるような、孤独とは対極のイメージがあるのではないだろうか。そこで、今回は私が感じた国際化の中の孤独について記してみたい。

かりにあなたがどこかの国に行ったとしよう。首都にいるうちは、その国の本当の姿がわからないと考えるのではないだろうか。本来の国際化は、その国の普通の人々が住んでいる田舎に行ってこそ可能である。そう思ったあなたは田舎に足を運ぶ。そして、本当に彼らの生活を知るためには、そこそこ長い日数滞在する必要があると考えるだろう。そこで地元の人々に歓待を受けて、数日は興奮のうちに過ごすかもしれない。

数日たつと、周囲の人々は普通の生活に戻る。すると、あなたは自分がその土地で、まったく無力であることに気づく。現地の言葉が話せない。どこに何があるのかわからない。その土地の常識も知らないで、知らず知らずのうちに他人に迷惑をかけていることもある。反対に、向こうが気にしていないことをくよくよ気に病んだりする。周囲の人々にとってあなたは、手の掛かる大きな子どもである。そうしてその地域に住む文化や習



タイの農家にホームステイした筆者(右から3人目:1986年)。別れの朝。

慣が共通の人々の海の中で、あなたが浮いた存在であることに気づくだろう。これが、国際化をどんどん推し進めて、他の文化に到達したときに感じる孤独である。

●国際会議の中の孤独

読者の皆さんは言うかもしれない。はたしてそれが本当の国際化だろうか、と。外国の村に暮らす外国人は「国際人」というイメージと少々異なる。国際社会で活躍する国際人は孤独を感じるだろうか。

では次に、あなたが国際会議に招待されたとして。その会議には世界から各国代表が招かれている。日本からはあなただけが招待されている。当然日本語への通訳はない。英語だけの世界だ。

あなたの任務はその会議であるテーマについて報告することである。あなたの報告には質問や意見が寄せられるであろう。それは公開の場で行われ、反対の立場から敵意を持った発言があるかもしれない。また敵意はなかったとしても、身体が小さくて髭も生やさず、英語がうまくない日本人は目下にみられることがあり、論ずような調子で意見されることもある。それら発言の真意を理解し、短時間で得意即妙に答えることが期待される。しかし、そんなことはなかなかできるものではない。多くの場合、相手の発言1つ1つに右往左往し、時には真意を取り違え、軽率な受け答えをしたり、相手に失礼に当たるような単語を使って、後で落ち込んだりする。

ここで強調しておきたいことは、多くの発展途上国の「国際人」達は、旧宗主国の言語、つまり旧英領・米領の場合には英語、旧仏領の場合には

フランス語が堪能だということである。南アジアのほぼすべての国、シンガポール、マレーシア、フィリピンや、ナイジェリア、ガーナ、ケニア、タンザニア等の「国際人」はかなりの程度英語慣れしている。仏語圏アフリカの人々同士は国が違ってもフランス語で意思疎通をしている。たどたどしい英語しか話せない日本人(もちろん全員がそうだと知っているわけではなく、私の英語がたどたどしいだけである)は、類は友を呼ぶ、というわけで、なんとなく同じ問題を抱えていそうな人々(時には韓国人だったり中国人だったりタイ人だったりする)と、傷口をなめ合うがごとく、つるんでしまったりする。要するに、国際会議のような場でも、私は強い孤独感を抱く場合が多い。

●現代版・家出のすすめ

英語でものを書いたり読んだりするようになると、英語にもうまい文章やうまい言い回しがあることに気づく。そして、そういう才能のある人に嫉妬する。というわけで、私はアメリカ人に嫉妬している。彼らは英語がうまいからである。

一方、日本人は一般に日本語がうまい。であれば、それぞれの優位性を活かして、アメリカ人はアメリカに、日本人は日本に住んでいればいいのではないだろうか。なぜ無理をして外国に行く必要があるのだろうか。

その答えは、月並みではあるが、中田英寿、野茂英雄、イチロー等が指し示しているものである。要するに、すでにわれわれは日本では収まりきらないのである。もっと広いところで勝負しなければならぬ。研究者も同じである。もっともスポーツ選手とは活躍の次元や格好良さが全く異なるが。

かつて寺山修司は「望郷の歌をうたうことができるのは、故郷を捨てた者だけである」(『家出のすすめ』)と書いた。望郷という甘露を味わうためには故郷を離れなければならない。国際化に伴う孤独もそういったようなもので、時には甘美な匂いさえする。しかし望郷に切なさがついて回るように、国際化の中の孤独も、容易には解消しないだろう。なぜなら、いくらうまくなくても英語はなかなか完璧にはならないからである。その劣等感を背負ったまま、どうにかこうにか国際化しなければならないというのが、多くの日本人の常態なのである。